

岸田家見学のしおり

やね 屋根うらのつくり

どま やね
土間から屋根を
みあ いちぶ
見上げると、一部
ぶん てん
分には天じょうの
いた やね
板がなく、屋根う
らの様子わかり
ます。太い梁で屋
ね
根がささえられて
います。

やねがみ 屋根神

やね なか ほくら
屋根の中ほどにある祠
は屋根神といいます。小
まき まち おお
牧の町は、むかし、大き
な火事がありました。屋
ねがみ あきばさま
根神は「秋葉様」という
ぼうか かみさま
防火の神様をまつたも
のです。今でも上街道に
すうけん いえ やね
そった数件の家の屋根に
み
見ることができます。

ここを
よく見てみよう！

おもてど いぐち 表戸 (入り口)

きしだけ しょうめん み おもてど しょうじば まど でごうし
岸田家を正面から見ると、表戸は障子張りになっていて、窓には出格子がもうけてあるのが
わかります。岸田家が建てられたころは板戸でしたが、庄屋をつとめることになり、武士など
みぶん たか ひと でい げんかん ま ひつよう
身分の高い人が出入りするため、このような玄関の間につくりかえる必要があったようです。

でごうし まど 出格子の窓

小牧宿の町並み

しゆく 宿のようす

きしだけ ひがし みち うわかいどう よ なごや なかせんどう
岸田家の東の道は上街道と呼ばれ、名古屋と中山道を
おす こまきしゆく かいどうぞ はってん まち いえ みせ
結んでいました。小牧宿はこの街道沿いに発展した町で、家や店は
まぐち おくゆ ふか えどじだい なか
間口がせまく奥行きの深いつくりになっています。江戸時代の中ご
ろの小牧宿は、家が約250軒、人口1500人の町並みでした。

ほん じん 本陣

あわりはん やくにん しゆくはく きゅうけい しせつ こまきしゆく
尾張藩の役人が宿泊・休憩する施設です。小牧宿では
だいだい えさきげ
代々江崎家がつとめてきました。

ご てん 御殿

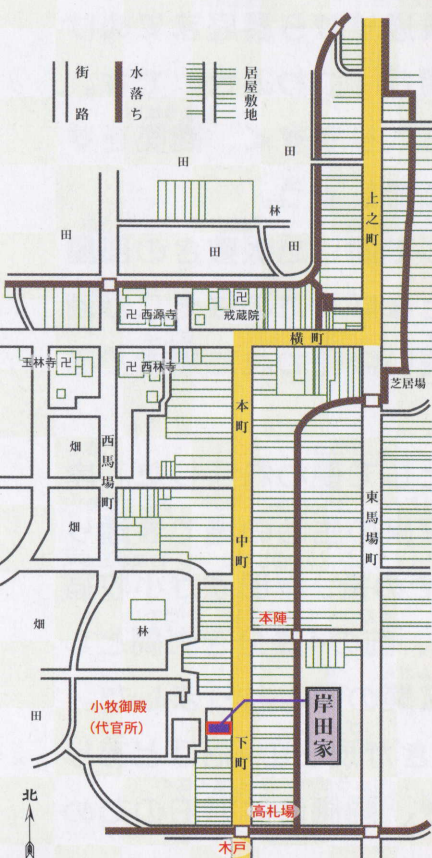
あわりはんしゅ こまき た よ きゅうけいしせつ
尾張藩主が、小牧に立ち寄ったときの休憩施設として
た ごてん にわ かにしみず いげ しみず
建てられました。御殿の庭には、蟹清水とよばれる池があり清水が
わき出ていました。

き ど 木戸

こまきしゆく みなみ い ぐち きどふきん すいる
小牧宿の南の入り口でした。木戸付近に水路があり、
ひとひと あし あら しゆく はい
人々はここで足を洗ってから宿に入りました。

こうさつば 高札場

きど だいかんしょ しじ か
木戸を入ったところにあり、代官所からの指示が書か
れていました。



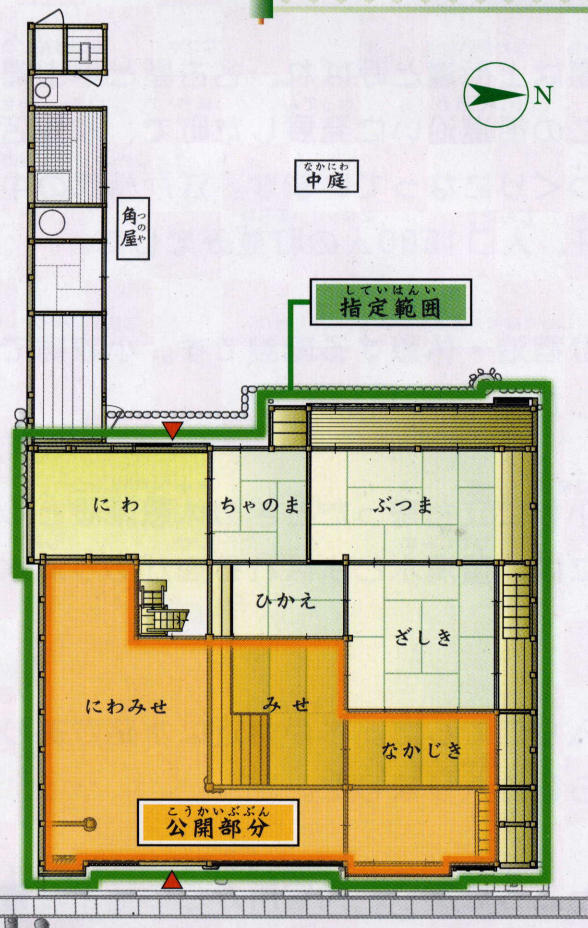
岸田家住宅のうつりかわり

① 当初のすがた (1800年ころ)	② 大改造後のすがた (1830~43年)	③ 明治維新後 (1863年~)
2階 1階		
◆ 土間と板の間 ◆ 二列の部屋	◆ 西側を増築 ◆ 三列の部屋 ◆ 出格子の窓	◆ 「にわみせ」に縁台 ◆ 「みせ」をひろげる ◆ 玄関の間をなくした

この姿に
建て直しました

岸田家
江戸時代の後半の天保年間(1830-44)ごろ小牧村の庄屋をつとめ、岸田七衛門のとき、天保川を開く工事などに力をつくしました。また、小牧宿の脇本陣として、本陣・江崎家の役割をおぎなってきました。

部屋の間取りの特ちょう



岸田家の表戸を入ると、表通りから裏庭までぬける土間があります。この土間が「にわみせ」です。このような土間は表通りから入りやすく、商売するのに適したつくりといえるでしょう。

「にわみせ」に仕切りなしで面した板敷きの部屋が「みせ」です。「みせ」とよばれたのはそこが商売の話し合いや品物の売り買いに使われた場所であったからです。

「なかじき」は玄関の間として使われました。岸田家が建てられたころは、家族の生活の場で表通りに面した8畳の部屋でした。その後、岸田家が小牧宿の庄屋をつとめることになり、前の4畳分を土間として「にわみせ」から入れる玄関の間となりました。

かつての岸田家には、奥行きが現在の4倍ほどありました。その奥まで庭が続き、両側には宿泊のための部屋などがありました。